
鈴鳴町怪異録

宮崎 城野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴鳴町怪異録

【Nコード】

N8905G

【作者名】

宮崎 城野

【あらすじ】

『鈴鳴村怪異録』なる六冊の古書をめぐって、高校生・山猫村玄幽と、彼をめぐる人々が織り成す、六つの不可思議な物語。笑いがあり、涙があり 人間の「想いの強さ」が生み出す奇跡は、玄幽たちのみならず、彼らの暮らす町にも少しづつ染み渡っていく。

第0話 プロローグ

運命、永遠、願いだとか恨みだとか愛だとか。

とにかく人間ってやつは、そういう目に見えないものをとって
大事にしてきた。

何も今に始まったことじゃない。ずっと昔からそう。

時に、想いの強さは、言葉に託すにはあまりにも強くなりすぎる。
時に、自らの人生への希求は、人の足を無我夢中で走らせる。
時に、誰かへの憎しみは、人を思いも寄らぬ場所へと誘う。

見えないものってというのは、見えないだけで、人間の中にしっか
りがある。

そういうものを、私たちは「心」と呼んできた。

嬉しい心も、不安な心も、静かにそっと胸に包んで、そうして誰
もが、次の朝日を待った。

暗い昼もあれば、明るい夜もあった。

ひとりで寂しければ、もうひとりが傍にいた。

ふたりが悲しければ、たくさんが寄り集まって笑いあった。

心の強さも、心の弱さも、人間そのものだ。

そしてそれは本当に美しいものなのだ。

この国は、ずいぶん変わった。

モノが溢れた。空気が汚れた。山が削られ、海が埋められた。死人みたいな顔をして人々は歩いている。

それでも、人間は、人間の想いの強さは……。人を想い、物を想い、町を想い、世界を想う人間の心は、変わらない。

私はそう信じている。

今、ここに六冊の本がある。

表紙にはただ素っ気無く、『鈴鳴村怪異録』と記されている。

紐で閉じられ、ところどころ虫に食われた跡があり、全体的にくすんだ色をしている。

ちよつとでも雑に扱えば、あっという間に崩れてしまいそうな、古い本。

中身は、なんてことない話だ。

どこにでもある、ありふれた話。

嘘も混じれば誇張も憚^{はまか}る。

涙もあれば笑いもある。

それでも、滑稽なほどの「心」が、溢れるばかりにこの本には詰まっている。

私は今から、この六つの物語について話そう。

いや、その言い方だとちょっと足りないか。

正しくは、この六つの物語によって、右へ左へ翻弄されてしまう人々の話、だ。

え？ 私が誰かって？

まあ、そこら辺は追々、ってことで、ここでは勘弁願えないかな。その内分かるさ。きつとね。

さて、まずは一冊目。

準備はよろしいですか。

第1話 第01章 溜息の朝

朱色に湿る古傘の、骨に染みるは誰の血か。

虫に食われし傘紙に、深くつつまれ静かに泣くは、愛か恨みかモ
ノケか。

この一連の出来事の幕開けは、そろそろ秋も終わりを告げようか
という十一月の末の、とある金曜日のことであった。

山から吹き降ろしてくる乾いた風が大地を駆け抜け、すっかり紅
葉した秋の葉を舞い揚げる。

空は高く澄み切って、幾筋もの細長い雲が、ゆっくりと南へ流れ
ていく。

鈴鳴町は、決して大きな街ではない。
すずなり

役所のある猫の額ほどの中心街を離れば、あとは集落や工場地
帯が点々とするだけで、その面積の大部分は稲作のための田圃が占
めている。周囲をなだらかな山に囲まれた盆地で、夏は蒸し暑く、
冬は底冷えが街を覆った。

この鈴鳴町の西の外れの山のふもとにあるのが、鈴鳴高校である。
低い山の緩やかな傾斜に、町を見下ろすようにして校舎が佇んで
いる。

その日の朝はとりわけ寒かった。

十一月にしてはいささか冷たすぎる空気の中を、坂道に沿ってな

だらかに伸びる銀杏並木をなぞるようにして、制服姿の学生たちが急ぎ足に歩いている。

この頃になってちらほらと、コートやマフラーを着込む学生の姿が目立つようになっていた。

はあ。

山猫村玄幽やまねこむらげんゆうは大きなため息を吐いた。息が白く膨らむ。

微かに眉間に皺を寄せ、自分のつま先の数歩先に視線は固定したまま、玄幽は重い足をひきずるような思いで歩く。

べつ甲ぶちのメガネが少し傾いているが、本人はそんなことは気にならない様子だ。

いつもなら整っている少し長めの髪も、どうにも元気がなく乱れている。

学校が嫌で嫌でしようがなくて、こののっぺりとした坂道をただただで暗澹あんたんたる気持ちになる というわけでは決していない。

むしろ玄幽は学校を楽しみにする性質たぶの男である。

そんな彼が、このように沈痛な面持ちで登校する様子を遠巻きに眺め、事情など何も分からないクラスメートたちは声をかけるのさえ思わず躊躇ちゅうちゆってしまうのだった。

虚勢を張って見せたはいいものの……。

なだらかに伸びる校舎への坂道をなぞる間、玄幽のため息は幾度となく続いた。

校舎の上に広がる気持ちの良い群青の空はしかし、玄幽の気持ち
を洗ってはくれなかった。

さて、玄幽をこのように沈み込ませているそもそもの原因は、実に今彼の手に握られている通学鞆の中に入っている、一枚のプリントであった。

そのプリントは、昨日、生徒会長から直々に手渡されたものである。

第1話 第02章 回想

時を遡って、昨日、夕刻。

冬の夜は足が早い。窓の外はとっくに夜の闇の中に沈み、そこにはかろうじて夕陽が名残を留めているばかりであった。

冷気をたっぷり孕んだ風が、校庭の木々をざわざわと揺らしている。

「と、いうわけだ。質問はあるかい？」

凜とした声が部屋に響く。

玄幽は机を挟んで座っている女を一瞥し、また手元にあるプリントに視線を戻した。

狭い部屋の中には、玄幽と彼女の二人しかいない。綺麗に片付けられた机の上には、どちらも手を付けられていない湯飲みが、空しく湯気を漂わせている。

「質問はありませんがね」

玄幽はプリントに目を落としたまま呟く。窓が風でガタガタと震えた。

「ちょっと急過ぎるんじゃないですか。これに該当する部活動なんてそれこそ十は下らないでしょう？ 批判だって、押さえ込めるわけがない。最悪、生徒会の活動事態、難儀なものになる可能性だつてあるんじゃないですか」

女 山梨香夏子やまなし かなこは口元をにやりと釣り上げる。

いかにも気丈な雰囲気きんじょうが全身から立ち上っている彼女は、その手腕てんぱんの鋭さと容赦ようじやうの無さで多くの学生からの信頼を預かり、また一部の学生からは「鬼」などと揶揄げうされてもいる、鈴鳴高校の生徒会長である。

「来年度から生徒会の予算が大幅に削られることになったのは君も知っているだろう？ 今まで通りの活動をしていたんじゃ半年で立ち行かなくなる。多少の犠牲はやむを得ないんだよ……ねえ、」

彼女はうつすらと笑ったまま、すつと顎あごを落とし、玄幽を見つめた。

まっすぐ伸びた黒い髪が彼女の頬ほに、はらりとかかる。高校二年生にはまるで似つかわしくない艶えんつぽさに、こんな状況でなければ玄幽も見惚おぼれていたであろう などと考えるのはいささか早計だ。その整った顔立ちにくつきりと張り付いた彼女の瞳は、玄幽を射すくめるように見開かれていた。

「背筋が凍る」。

この言葉の意味を、玄幽は生まれて初めて、身をもって知った。

「それにね、どうやらこの学校には、活動実態がないにも関わらず抜けぬけと予算をもらい、遊び呆ぼろけている部活動すらあるらしいんだ」

「……お、お言葉ですが、ウチは毎年他校と合同で勉強会だっけ開いているし、きちんとした論文集を発刊してもいる。それはご存知でしょう？ ほ、ほら、その本棚にだって三ヶ月前に作った研究文集が……」

目を白黒させて弁明する玄幽をひとしきりあたふたさせると、満

足したように山梨は目を細めた。

「ふふ、何もこのことを言っているわけじゃないさ。そういう部活動もあるっていうだけだ。ここはきちんとやっている、私だっと思っていろいろさ。しかしね、今はそんな事を言っている場合じゃないんだよ」

そこで言葉を切ると、山梨はくるりと首を回して部屋全体を眺める。

こじんまりとはしているが、とてもよく整理された部屋で、これは玄幽の几帳面な性格がそうさせるものであった。しかしそこには玄幽の荷物しかなく、また彼以外の誰かの存在を感じさせるものは一切見当たらない。

「山猫村くん だったね。確か君が部を預かるこの郷土史研究部きょうどしけんきゅうぶには、君の他に四名の部員がいたという風に記憶しているが……今日はお休みかな」

ギクリ、と玄幽はまたも凍る。

自信あり気な、絡みつくような山梨の声が腹立たしくてしやうがなかったが、やがて玄幽はいかにも苦々しく、口を開いた。

「……辞めさせましたよ」

「ほほう、それはどうして？」

「四人の内二人は幽霊部員、半年に一回すら顔を出しません。残る二人は部室に来て漫画を読んで帰っていただくだけ。そんな連中、いたってしょうがないでしょう？」

「ふうん。まあ、もっともだな。そんな連中がいたら私だって追いつく出さるつさ」

彼女は哀れむような目で玄幽を見た。

「もつともだが、これでいよいよ君の立場は、そしてこの部の存続は危うくなったようだな。まあ、一応存続させる道は用意されている。せいぜい頑張ってくれたまえよ」

話は終わったとばかりに手をパン、と叩くと、山梨は席を立ち、扉へ向かって颯爽と歩き出した。残された湯飲みからは既に湯気が消え失せていた。

玄幽はプリントに目を落としたまま、苦々しい表情で黙り込んでいたが、

「……まあ、見ててくださいよ」

山梨がドアを閉める寸前、はつきりとそう口にした。

彼女はドアの隙間から視線を寄越し、軽く肩を上げ、そしてゆっくりとドアを閉めた。

……パタン。

廊下から入り込んだ冷気が、部屋の空気にわずかに混ざった。

玄幽は金縛りから解けたように身体の緊張を解くと、イスの背もたれに身体を乱暴に預けた。メガネを外してつるを噛む。何の気なしに啜ったお茶は、驚くほど不味かった。

「やっぱあの人、苦手だ……」

プレッシャーから自分が急に老けてしまったような気がして、玄幽は顔をゴシゴシとさすった。そして自分のお茶を一気に飲み干し、その勢いで山梨が口を付けず残していったお茶も一息に飲み下した。

部を存続させる道、か。

玄幽は改めてプリントを見る。そして自分が辞めさせた部員たちのことを思い出し、自分の下した判断を少しばかり後悔した。ろくでもない連中だったが、いないよりはよっぽど良かったのだ。

プリントに書かれていた事を簡潔に要約すると、次のようなものだった。

『 来年三月の時点で、活動部員数が十名に満たない部活動は、その活動の停止と解散を命ずる』

部を存続させる道。

それは来年の三月までに、部員を九人、増やすことだった。

第1話 第03章 苦悶の玄幽

午後の授業も全て終わり、玄幽は教室を出て部室棟へと向かう。昨日の悪夢のような出来事に頭を抱える玄幽にしてみれば、気が付けば一日が終わっていた。

窓から見える空には、手にとって千切れそうな羊雲が、まるで群れから逸れたように一塊だけ浮かんでいた。

玄幽はそんな雲をぼんやりと眺めながら、人で混み合う廊下を歩く。

鈴鳴高校は古い高校である。

歴史ある、という修辞を与えることももちろん出来るけれど、学校全体から漂う古臭さがどうしても先に立ってしまう。壁のあちこちがひび割れ、床の至るところが歪んでいた。

それでも、修繕工事の施された教室棟はまだまともな方で、木造建築であることを隠そうともしない部室棟は、いつそ潔いくらいに老朽化していた。

耐震性能は大丈夫なんだろうかと玄幽はよく疑問に思った。

教室棟から部室棟に入り、ギシギシと不安定に軋む階段を上って、玄幽は二階の廊下を歩く。

窓の外には部活を始めようとする学生がパラパラと散らばり、その向こう側には鈴鳴の町が広々と広がっていた。

町全体がなだらかな坂道のようになっているので、それほど高いところまで登っているという実感がなくても、校舎から眺める町は随分と低く見下ろせた。

「寒い……」

建物の中なのに外界の空気が容赦なく入り込んでいて、玄幽は思わず身震いし、コートを着てこなかったことを少し後悔した。

廊下の一番奥にある北向きの、日当たりの悪い部屋が、郷土史研究部の部室であった。

あつてもなくても大して変わらないだろうというような古鍵を開け、部屋に入る。

電気ストーブのスイッチを入れて、電気ポットに水を補充し、椅子に座ったところで大きく息をつく。

朝から今まで玄幽はずっと考え通しで、ぐったりと疲れ切っていた。

玄幽がずっと考えているのは、もちろん研究部のことであった。

しかし、一向に良い案が思い浮かばない。

もちろん、部員の数だけを増やすのであれば話は簡単であった。

名前だけを借りればいいのだ。

玄幽は生真面目な性格ゆえに少々変人扱いされることはあるにせよ、友達の数は決して少なくはなかった。彼ら彼女らから名前を借りれば、一応この窮地をしのごうことはできるかもしれない。

しかし、その元来の生真面目さが邪魔して、玄幽はその考えについて非常に後ろ向きであった。一時しのぎなんて安易な発想を、玄幽は絶対に認めるわけにはいかなかったのだ。

それに、鬼の目を持つという生徒会役員たちが、部員の実態調査をやらなくとも限らない。いや、連中のことだ、初めから名義借りなんて予想済みだろう、と玄幽は考えた。今度の予算削減とやらは、それほど深刻なものでもあるらしかつたのだ。

何より、玄幽はこの研究部が大好きだったし、この先もずっと存

続し続けて欲しかったのだ。

つまり、実際にやる気のある部員を探し、九人、入部して貰わねばならない。

これはかなり難しいことであった。

なんといつでも部活動の内容が内容だ。

郷土史研究部。救いようのないくらいマイナーな、初めて耳にする人間の頭に疑問符を浮かばせるためにあるんじゃないかという部だ。

活動内容は、主に鈴鳴町界隈の歴史の研究、ということらしい。鈴鳴町は決して大きくはないものの、近隣の山々の交通の要所として、長い歴史を持つ街である。至る所に寺社があり、また歴史的に重要な文化財も散見できる。玄幽が現在たった一人で取り組んでいるのは、鈴鳴町界隈にある伝説や民話を蒐集し、系統的に研究するというものであった。

そのようなマイナーな研究に興味を示す若者は当たり前のようになく、そもそも興味のある人間ならばとっくに入部しているはずであった。

どうにかして、研究部そのものに、興味を持ってもらわないと。

電気ポットが大きな電子音をたて、湯が沸いたことを知らせた。

玄幽は思考を一旦中断し、頭を軽く振ると、急須に新しい茶葉を入れる。

じっくり考える。まだ時間はある。

熱いお茶を啜って一息つくつと、玄幽は壁際の本棚にびっしりと詰まった書物に目を向けた。

そこには、先輩や自分が蒐集した、鈴鳴町に関する様々な資料が詰め込まれていた。

詰め込まれたといっても雑然とした印象は無く、几帳面な玄幽の手によって整理されたそれらはいかにも整然としていた。

玄幽は一学年の時からそれらの書物に手をつけてきたが、まだ読んでいない資料もたくさんあった。それほど膨大な数なのである。中には地元の郷土資料館に保管されていてもおかしくないようなものもあると玄幽は聞いていた。

何気なく　まだ読んでいない書物群の前に玄幽は立った。

朝から考え詰めで、少し本でも読んで頭を休めようと思ったのだ。読書はより頭を疲れさせそうなものだが、玄幽に限って言えば、読書こそが至高の時間であり、読書をすることによって彼は本当にリラックスすることができるのだ。そういう、少々偏執狂じみたところが玄幽にはあった。

それに、何かヒントがあるかもしれないしな。

玄幽が何気なく手を伸ばしたのは、似たような背表紙を持つ古書の一冊だった。その中でもとりわけ古めかしい一冊を手取る。

背が紐で閉じられた古書で、パラパラめくると絵と文で構成されているようだった。文字には「くずし字」というものが使われ、これは基本的に平仮名なので、先輩から読み方を教わっていた玄幽は難なく文字を読むことが出来た。

表紙には　『鈴鳴村怪異録』と書かれている。

おや、と玄幽は思った。鈴鳴村というのは、鈴鳴町のかつての名

称だ。このような資料があったのかと、玄幽は自分の見落として驚いた。彼は鈴鳴町の伝記や伝説を蒐集しているわけだが、てっきりこんな部屋にはないものだとばかり信じ込んでおり、資料はもっぱら民俗資料館や図書館に頼りっぱなしだったのだ。

灯台元暗しってやつか。

思わぬ収穫に喜びながら、玄幽は席に戻り、ページをめくった。

第1話 第04章 鈴鳴村の怪

玄幽が手にした『鈴鳴村怪異録』、物語の内容を完結に記せば、以下の通りである。

かつてこの鈴鳴の町に、とても綺麗な娘が住んでいた。

名を多恵たえといい、年の頃十七、今が盛りとばかりに溢れ出る美しさながらも、本人は至って謙虚なもので、その器量の良さから小町と評判になり、近隣の村々に知らぬ者はいないという大騒ぎをされた。

やがて様々な求婚の嵐をかくくぐるようにして、多恵は村の侍と恋に落ちる。

この侍というのが村を取り仕切る武家の一人息子で、名を与右衛門よえもんといい、村一番の男前、武術の腕も一流、そしてその性格の良さまでも、何をとっても文句の付けようのない男であった。二人はまさに相思相愛といった様子で、縁談は実にとんとん拍子で進んだのだった。

しかし物事は順風満帆にはいかない。

多恵も与衛門も謙虚で実直であったが、二人はどつにも目立ちすぎた。目立ちすぎれば視線が集まる。幸せがあれば妬みも生じる。人間の負の部分といえればそれまでであるが……。

この幸せそうな二人を、実に恨みがましい目で見つめる、一人の女がいた。

その女は名をおみきといい、江戸生まれの江戸育ち、生粋の江戸

つ子であった。元はお武家の三女で、江戸では小粋を通したものの、家が落ちぶれ、鈴鳴村などという偏狭の地に落ち延びざるを得なくなってしまうた。

無論、片田舎の水飲み百姓との結婚など、おみきには我慢できるはずもない。おみきは、与右衛門との結婚こそ唯一の、最後の希望と、それと分かる程激しく、何度も迫ったのに、派手物嫌いな与右衛門は一向に相手にしなかった。

そんな与右衛門に苛立ちを募らせていたところに、この多恵との縁談話である。

なにさ、このあたいを差し置いて、あんな小便くさい田舎娘と！

おみきは決して不美人というわけではなかった。否、むしろ誰もが認める美人であった。

色白の肌に化粧は欠かさず、都会者の垢抜けた妖艶な容姿に、村の男たちは釘付けになっていた。

それ故、であろう。おみきの怒りは収まるところを知らず、それは二人の婚礼の儀が近付くにつれて高まっていった。

傷つけられた女のプライドとはさながら振り上げた拳に近く、収まりどころを見つけないければ、自然に消えるというものではない。

そしておみきの怒りは、容易に想像できないほどに高らかに燃え盛ってしまった。

不幸なことに。

さて婚礼の儀の前日となったある雨降りの晩、おみきは多恵を村はずれの井戸に呼びつけた。

もちろん、誰にも知らせるなと念を押して。

雨は激しく、提灯の明かりは数歩先も照らしてはくれなかった。昼間でさえほとんど人のやってこない場所に、こんな雨の晩に誰がやってくるはずもなかった。

「おみきさん？」

薄暗がりにはぼつと佇む提灯の明かりが照らすおみきの白い顔に静かに恐怖しながら、多恵は声をかける。

その声を聞いてゆっくりと面を上げたおみきの顔に、表情はなかった。

「お多恵さん、わざわざこんな晩に来てくださって　ねえ、婚姻の前晩だつてえのに、本当に済まないねエ」

「はあ……、それで、どういったご用件でしょう」

おみきは見事な朱塗りの傘を、多恵は地味な灰色傘を頭上に広げていた。多恵は水飲み百姓の娘、高価な身なりをしたおみきの前では服装の素朴さが目立ち、またそれ故に、多恵の秀麗な容姿がありありと浮かびあがるのだった。

おみきはギョツと唇をかみ締める。

この女が、いなければ。

直後である。

「あんたみたいな雌犬めいぬはねえ、井戸の底にでも沈んでるのがお似合いだよつ　！！」

素早い動きだった。

おみきは傘を投げ捨て、多恵の帯に手をかけると、井戸の淵に押

しやり、一気に多恵を井戸の幽暗ゆいあんの中に放り込んだ。

そのような事態を予想していなかったためか、またあまりにあつという間の出来事だったためか、多恵はほとんど抵抗することも敵わず、井戸の中に消えていった。

無言の内に。

枯れ井戸だったのだろう、多恵が底に落ちる惨たらしい音を聞き届けるや、おみきは笑った。

それはさながら鬼の形相であった。

……一夜明けて。

当然、村は大混乱に陥った。

婚礼の前日に娘がいなくなった両親は村中を狂ったように走り回り、村人総出で鐘や太鼓を打ち鳴らしての大搜索を行った。はて、狐に取られたか自ずから逃げ出したか……、姿どころか亡骸さえ見つからぬ以上、もう村人たちに手立てはなかった。

もちろん婚礼の儀は取りやめになり、やれ武家に恥をかかせたなと多恵の両親は村を追われた。おみきはここぞとばかりに、すっかり落ち込んでしまった与右衛門を励まし、騙しすかして虜にせしめた。後悔の念も、懺悔の念も、その白粉で厚く塗られた顔にはなかった。多恵のことには一切触れず、与衛門の傷口を優しく包むように寄り添い続けたおみきに、彼はあっさり心を奪われてしまった。

その一年後、与右衛門とおみきは婚礼の儀を遂げる。

その頃からである。

街に妙な噂が流れ始めた。

朱塗りの傘を差して歩くと、得体の知れぬものに出会うという。

雨の降る夜半、真っ赤な傘をさし、娘がひとり家路を急いでいると、ふと前方に提灯の明かりがある……。

こんな時間に誰ぞ　と不審に思うも、ほかに道はない。
娘は小走りでその人物の前を通り抜けようとするが、不意に傘を
はっしと掴まれて、中を覗かれる。

傘の中を覗き込んできたものの形相に、娘は言葉を失う。

『……………違アう……………』

それは、骸骨髑髏に黒髪がぼうぼうと生えただけの、人ならぬ魔
物であった。

低く、地を這うような声に、娘は気を失って雨の地面に崩れ落ち
る……………。

その魔物は、朱塗りの傘をめくっては、これも違う　これもだ

と呟き、物悲しそうに闇に溶け込んで消えていくのだという。

人はそれを多恵の幽霊だと恐れ、街外れに祠を築き、彼女を手厚
く祀った。

……………。

そこで話は終わっていた。

よくある怪談話とはいえ、なんとも後味の悪い話だ、と玄幽は深
くため息をつく。

まあこれはこれで資料として使えそうだ。

玄幽が本を本棚に戻そうとしたところに、ひらり、と小さな紙片
が舞い落ちた。

「ん」

慌てて玄幽はそれを拾い上げる。それは今眺めていた本のページに挟まっていたもののようであった。

このような古書、民俗資料館に入っているもおかしくないのだ、粗末に扱うことは許されない。

「……なんだ？ これ」

その紙片は 長方形の細長い紙であった。何か文字が書かれているが、紙片がかなり劣化している為、玄幽にはほとんど読み取れなかった。

ただ、なんとなく御札のように見えるな、と玄幽は思った。でも、なぜそのようなものが挟まっているのかが理解できなかった。何かの拍子に紛れ込んだのだろうか、あるいは本に信憑性を持たせるための一種の洒落かもしれない。玄幽は、その札のような紙片を何気なく、机の上に置いた。ほんの少し興味も沸いたし、ちよっと調べてみようと思ったのである。

結果的に、これが全ての始まりとなった。

後に続く、因果と怨念に縛られた、血なまぐさい物語のそもそもの原因は、この時の玄幽の行動であることは間違いなかった。

玄幽がお茶を淹れなおして机に戻ると、紙片は、既にどこにもなかった。

「……ん？ あれ？」

第1話 第05章 七塚聖の朝

さて。

進退窮まる部活動の存続に向けて玄幽がひたすらに悶々としている頃、同じ鈴鳴町の片隅で、もうひとつの事態が進行していたという話を語っておかなければならない。

十二月に入り、秋の色は既がない。

人々の服装は重くなり、忙しさと年の瀬の高揚感が緋い交ぜになった師走の空気が静かに街を覆っていた。

その日は朝からすっきりしない天気で、のっぺりとした雲が垂れ込める空からは、手を伸ばしてやっと分かる程度の霧雨が音もなく降り注いでいる。

七塚^{ななつか}聖^{ひじり}は、巫女装束の上にダツフルコートを着込み、寒々しい境内を横切つて蔵へと向かっていた。

早朝ゆえに、七塚神社の境内には彼女の他に人影はなく、しんと静まり返っている。

赤や黄色の葉っぱが、濡れて地面に張り付いている。彼女が砂利を踏みしめ歩く音がやけに大きく響く。

りく^{はる}婆^{おば}ちゃんたら、蔵なんか呼び出して何の用だろう。

聖の祖母、りくは昨夜、何の前触れもなく聖の部屋を訪れ、大切な用事があるから、夜が明けたら「誰にも気付かれないように」蔵へ来るように、と言いつけたのだった。聖はいぶかしんだものの、祖母の妙に逼迫した様子に、二つ返事で了承せざるを得なかった。

聖は短い髪についた雨雫を手で払う。

せっかくの日曜だし、今日は買い物に行こうと思ってたのになあ。

もやもやとしたものを抱えながら蔵の前まで来ると、既にりく婆は来ているようで、重々しい扉の前に草履が綺麗にそろえてある。

黄ばんだしつくい壁に所々ヒビが入ってはいるものの、重厚な佇まいの、昔ながらの蔵であった。普段その扉には重々しい錠前がかけておられ、中を覗くことは決して出来ないが、今日は錠前がかかっていなかった。聖は幼い頃に何度か蔵で遊んだという記憶はあるものの、中がどうなっていたのかはとうに忘れてしまっていた。

蔵へと続く低い階段を上り、草履を脱いで扉に手をかける。両開きのそれは見た目通りに重く、開けるのに難儀したが、やがて内側からの力が加わって扉はするすると開いた。

「待ってたよ。さ、中へお入り」

見慣れた白髪と巫女装束のりく婆が、扉に手をかけながら、穏やかに笑った。そしてその肩越しに覗き込んだ蔵の中に、聖は思わず目を見開く。

蔵の中には、一人の女が佇んでいた。

紫の鮮やかな着物を着た、線の細い女で、蠟燭の明かりだけのほの暗い蔵の中で、その肌の白さが異様なまでに際立っていた。

真っ黒な髪は腰の下まで伸びている。そこだけ、彼女の周りだけがぼんやりと霞んでいるような、幻想的な美しさだった。

一方、女のほうも、聖を見てはっと息を飲んだ。

紅を差した口がわずかに開き、切れ長の目は見開き、信じられないといったような表情を見せる。

だがそれは一瞬のことであつた。

女は驚きの表情をすぐに

「聖ちゃん　だね。本当によく来てくれた」

につこりと微笑み、その綺麗な手で聖を手招きした。

聖は、そのゾツとするような美しさに惹かれるように、蔵の中へ足を踏み入れた。

あるいは、運命の糸に手繰り寄せられるように。

第1話 第06章 多恵

蔵の扉が閉ざされ、外界からの光は完全に絶たれた。

蝋燭の明かりだけが煌々と蔵の中を照らし、箆や桶などの古道具の数々をぼんやりと浮かび上がらせる。

りく婆の紹介によれば、その美しい女はりく婆の古い友達、ということだったが、それにしては若すぎると、どうも聖は腑に落ちなかった。

それ以外に彼女に関する説明が一切なされないことも、どうにも解せない。

「あの、お名前を聞いてもよろしいですか」

聖がそう尋ねる。

女はなにやら感慨深げに聖を眺めていたが、やがて視線を落とし、ぼつりと呟いた。

「多恵^{たえ} 　　つてのが、あたいの名前さ」

瞬間、りく婆の表情に、ある種不可解な動揺の色が浮かんだが、聖にはそれが見えなかった。

「多恵さん　　それで多恵さんは、この私にどんなご用事でしょうか」

「うん、それなただけだね」

多恵は居住まいを正すと、聖を真正面から見据えた。

「いきなりこんなケツタイなところに呼びつけて、本当に悪いとは思うんだけど、聖ちゃんにどうしても頼みごとがあるのさ。妙な話に

なるんだけど、ここはひとつ、訳を聞かずに、あたいの話を聞いて欲しいんだ」

そして多恵は話し始めた。

神妙な面持ちで、ぽつりぽつりと、聖に話した。

奥歯にももの挟まったような多恵の、そう長くない話を聞いている内に、段々と聖の表情に困惑の色が表れてきた。

「つまり、これからこの街で奇妙な事件が起きるだろうから、その事件の情報を集めて欲しい、と。でもその事件がどんなものは、分からないんですね？」

多恵はほっこりと笑って頷いた。

「そういうことさ。聖ちゃんは頭が良いんだね、あたいの話なんかよりよっぽど分かりやすいよ。どうだい、引き受けてくれるかい」

多恵は眉間に皺を寄せて首をかしげる。

「いえ、あの……漠然とし過ぎて、わけが分からないんですが……」
「じゃ、聖」

無然とした表情で多恵に答える聖を、りく婆はたしなめようとするが、多恵はやりわりとりく婆を制した。

「いいんですよ、おりくさん。こんな無体な話、聞かされりゃあ誰だって首を傾げるに決まってるもの。でもね、聖ちゃん、あとほんの幾日かすれば、あたいの話も分かってもらえると思うよ。それに、あたいが今頼れるのは、聖ちゃんしかいないんだ」

「この通りだよ、と言って多恵が深々と頭を下げたので、聖は慌てた。

どうして私なのか、なんでこんな蔵の中で話をするのか 様々

な疑問は尽きないものの、聖は何故だかこの華美な女に好意のようなものを感じ始めている自分を自覚しつつあった。

悪い人じゃなさそうだし、きっと私にしか頼めない理由があるんだろう。

聖はそう思った。

「わ、分かりました。私にしかできないんなら、お引き受けいたします。だから顔を上げてください、多恵さん」

多恵はゆるゆると頭を上げると、その白く冷たい手でしっかりと聖の手を取り、何度も何度も礼を言った。

その目が少し潤んでいたので、聖はいよいよ慌ててしまった。

とりあえず聖は、鈴鳴町の事件の情報を集めて、多恵に逐一報告していくということを約束して、その日の話はお開きになった。

……………。

聖が蔵から立ち去ると、りく婆は多恵に向き直って口を開きかけたが、多恵の頬に涙が伝うのを見て、何も言えなくなってしまうた。

「いい子だねえ、聖ちゃんは。見ない間に随分と大きくなった。昔は豆粒みたいにすばしっこく蔵を駆け回っていたのにねえ。やっぱり、あの人にそっくりになった」

「……………誰だつて歳は取りますよ。あたしだつてご覧の通りさ」
深く皺の刻まれたりく婆の顔をまじまじと見つめると、多恵はころころと笑った。

「あんたも、子供の時分は随分やんちゃだったね。あたいはあんた

が蔵の二階から飛び降りて叱られてたのをよく覚えてるよ。……時間
間が経つのは早いものさ」

りく婆は蔵の中を見回して懐かしそうに微笑むと、ほつっと思を吐いた。

そしていかにも残念そうな口調で、「今度のこと、あたしがやってやれりゃあいんだけど……」と言った。

多恵はありがとう、と小さく言っていると、蔵の外の雨音に耳を済ませるように目を細めた。

「いいじゃないさ、若いあの子を信じてみようよ。ただ あの子には、ちよつとばかり辛い思いをさせちまうかも知れないけどね……」

親密な空気の中、蠟燭が静かに燃えていた。

雨は相変わらずしとしと降った。

第1話 第07章 赤い傘の噂

さて、この頃になって、鈴鳴町には妙な噂が流れ始めていた。

ある日、町の広報誌と一緒に、次のような題を冠した注意喚起書が配布された。

『町内で通り魔・変質者による被害多発中、赤い色の傘はなるべく差さないように』

内容はこうだ。

町中のあらゆる場所で、若い女性を狙った暴行未遂事件が多発しているということである。

犯人が単独犯なのか複数犯なのか、老若男女のいずれであるのか、また目的が何であるのかなど、詳しいことはさっぱり分からない。警察もかなりの人数を使って捜査を進めているが、小さい街であるのに、犯人の影形すら掴めない有様だ。

ただひとつ分かっているのは、犯人が「赤い傘」を差した女性を標的にしている、ということであった。

被害者はいずれも、襲われた際に赤い傘を差していて、その傘は例外なく鋭利な刃物によって切り刻まれている。

それにも関わらず、怪我人はただのひとりも出ていなかった。

この奇妙な事件に際し、犯人が見つからぬ以上、これ以上の被害を出さないためには、赤い傘を差さないように注意を喚起するより他に方法が無かった。

さて、肝心の犯人像であるが、実に奇妙なことに、被害者はその姿をまったく目にしていない。犯人は何の前触れも無く襲い掛かり、傘を切り刻むと、すぐに姿を消したということになるのだが、これは事件の全てのケースで共通していた。

しかし一体どうやって、人がいきなり眼前から消えうせられるものだろうか？

この事件は田舎で起きた怪事件としてマスコミなども日に日に大きく取り上げており、街に押しかける報道陣の数も日増しに多くなつていった。

「これ……！」

その時、聖は境内の掃除を済ませ、炬燵こたつに寝転んでテレビを見ていたが、ワイドショーでいかにもおどろおどろしく事件が報道されているのを目の当たりにし、思わず身を起こした。画面の中では見慣れた鈴鳴町の風景が目まぐるしく映し出されている。

多恵さんの言っていたことは、本当だったんだ。

そして聖はすぐさま本屋に出かけ、この事件について報じているあらゆる雑誌を買い占めた。雑誌によって報道の脚色の仕方は様々で、単なる変質者に過ぎないとそっけなく綴る記事もあれば、某宗教団体との関係を指摘するものや、人ならぬ何かの呪いなのではないか、などと極論するものまであった。それでも結局、共通項を探していくと、聖もおのずとそれにたどり着くことが出来た。

雨降りの夜……赤い、傘。

奇妙な事件。多恵がそう言っていたのを聖は思い出していた。確

かに奇妙だ。

聖はその日の内に蔵に駆け込むと、多恵に事件のあらましを説明した。

「そんなわけで、今街には赤い傘を持った女性を狙った通り魔が出ています。それも、雨降りの夜にだけ現れる……ねえ多恵さん、多恵さんが言っていた奇妙な事件っていうのは、このことじゃないんですか」

急き込むように話す聖を落ち着けるように間を開けると、多恵はキセルを口から離し、ゆっくりと煙を吐いた。そして二、三度うなずくと、煙草盆に灰を捨てた。

「よく知らせてくれたね、聖ちゃん。そう 辻斬りかい。そいつはちょっとばかり厄介だねえ」

「ねえ多恵さん、多恵さんはどうして事件が起こるって知ってたんですか？」

いかにも不思議そうに首を傾げる聖の頭を、いとおしむようにそつと撫でて、多恵は悪戯っぽく微笑んだ。

「ふふ、そいつは言えないねえ。聖ちゃんも分かるだろう？ 美人には秘密がつきものなのさ。……ごめんねえ。世話になっておいて申し訳ないんだが、ちょっとばかり言えない事情があつてね。ただ、今度の件はあたいにとって、とても大事なことなんだよ。あたいはこの件と 深い、繋がりがあんのさ」

多恵はすつと立ち上がり、蔵の戸の前に立つと、扉の隙間から見える神社の境内と、その頭上に広がる晴れ晴れとした師走の空を見やった。

聖はそんな多恵にぼつと見とれてしまう。

今年は雪が早そうだね、と多恵は言った。

「ねえ聖ちゃん、今度あたいと一緒に、街へ降りちゃくれないかね」

「街へ……ですか？」

「そう。雨降りの夜に、赤い傘を差してさ」

木枯らしが吹いて、庭の松の木がびゅうと揺れた。

第1話 第08章 玄幽、赤い傘に想う

十二月も半ばを過ぎた。

雨がしとしとと降っている。師走の後半の、凍るような冷たい雨。鈴鳴の町はこれから、地獄のような盆地の冬へ向かって駆け下りていくことになる。

山猫村玄幽は頭の後ろで腕を組み、虚空をじっと見つめていた。部室には、彼の湯飲みから立ち上る湯気以外、動くものはない。放課後の遅い時間、おまけに雨降りとあって、部室棟は全体が奇妙な静けさに支配されていた。

玄幽は、降って沸いた今回の通り魔騒動に、強く引つかかっていた。

湯飲みの横に置いてある古書 『鈴鳴村怪異録』。

この通り魔事件と、この古書の内容には、奇妙に符合する点と、符合しない点があった。

符合するのは、雨降りの日に、赤い傘の女性が狙われる、という点だ。

しかしそれ以外がまるで合致しない。古書では傘の内側を覗き込まれるだけで、決して切られるようなことはない。そして覗き込んでくるのは、髑髏に毛の生えた化物なのである。

穿ちすぎだろうか？

しかし、玄幽の中に芽生えた奇妙な胸騒ぎは、一向に収まる気配

が無かった。

仮にこれがただの変質者による犯行であったとしても、古書との奇妙な符号点が引つかかる。

それに、犯人の姿を見た者は誰一人としていないのだ。これは「見逃した」のではなく、「見えない」何かが犯人だからではないのか？

元より玄幽は、伝記や伝説の類を鵜呑みにする人間ではない。

彼が現在蒐集している鈴鳴町界隈の伝説や神話にしても、それを明確な史実として捉えるのではなく、その裏に隠された「比喻としての文化」を読み解くためのメッセージとしてのみ、玄幽は読むようにしていた。

鈴鳴町界隈には多くの伝説がある。一つ目の巨人や人を化かす狐、そういったありきたりなものから、もつと特異なものに至るまで。

それらがかつてこの地を徘徊していた　という風に考えてしまつては、少なくとも民俗学的な視点からは間違いであると、玄幽は常々考えてきた。

とはいえ一方で、そういう得体の知れないものが「存在していればいいな」と思う気持ちも、玄幽の中にあるのもまた事実だ。妖怪も化物も幽霊もない、科学　理論と実践だけが是とされる世界なんて、玄幽は息苦しくてしょうがなかった。

これは、チャンスなのかもしれない。

玄幽は、相変わらず閑古鳥の鳴き声すら聞こえない、物寂しい部屋を見て思った。

この事件と、古書『鈴鳴むら怪異録』の内容を関連付けることが出来れば　もちろんそれが少々のこじつけであったとしても、人

々の心に残すインパクトは大きなものになるだろう。何の手がかりも無い事件であるし、マスコミは妙にオカルティックな報道脚色をしているし、何よりこの地味な街に起きた大事件、みんなが注目しているのだ。

俺がそれをアピールすれば、部に興味を持つてくれる人が出てくるかもしれない。そうすれば、部の存続が可能なくらいの人数集まるのではないか？

玄幽の目には、一種異様な輝きが宿り始めていた。

すっかり冷めてしまったお茶で喉を湿らせると、玄幽は『鈴鳴村怪異録』のページを繰る。まずはこの中からヒントを探さなければ。

.....。

生徒会長、山梨香夏子が通り魔に襲われたのは、実にこの日の夜であった。

第1話 第09章 山梨香夏子の遭遇

郷土史研究部の部室には、いつかのように向かい合わせで座る、玄幽と山梨香夏子の姿があった。

あの時と違うのは、山梨の顔に自信の色が全くなく、そこに明らかな憔悴の色が浮かんでいるということだ。

玄幽は難しい顔をして顎をさする。

「侍 ですか」

山梨はこくり、と頷く。そして両手で自分を強く抱きしめ、震えた。

「き、斬られた傘の隙間からはつきり見たんだ 血で濁った目、引きつった笑い、乱れた髪の毛、そしてあの……あのっ！ 血で染まった袴……！」

玄幽は席を立って、震え続ける山梨の背中をさすった。

昨日の今日で話を聞き出すのは、さすがに早かったか と玄幽は自分を責めた。

いかに鬼生徒会長の山梨といえど、まだ年端もいかぬ少女なのだ。事件のショックは想像を絶するものがあったのだろう。

侍、か。

玄幽は嗚咽する山梨の背中を撫で続けながら、少々混乱していた。山梨がその通り魔と遭遇したのは、昨日の午後七時くらいであったという。玄幽が部室で古書の解読に没頭していた頃だ。

彼女は生徒会の執務をこなすと、生徒会室を後にし、職員室に鍵を返し、そそくさと校舎を後にした。

その時彼女が手にしていたのは 真っ赤な傘だった。

もちろん、事件の噂を知らない彼女ではなかったが、勝気な性格故に、まるで事件を嘲るかのように赤い傘を常用していた。それに、柔道の有段者である彼女にとっては、学区内の治安を脅かす不届き者をとつちめてやりたいという思いも、少なからずあったのだろう。来るなら来い。そんな気持ちの山梨会長であった。

そして、校舎前の坂を下り、人気の無い田んぼ道に差し掛かったとき、それは現れたという。

「初めに、変な足音が聞こえたんだ」

それは何かを引きずるような音で、後ろから、段々と大きく聞こえてくる。しかし山梨が振り返っても誰もいない。

少し進んで、振り返る。

そんなことを二、三度繰り返す内、とうとう足音は真後ろに迫り、獣のような息遣いも耳に入ったという。

「それで私、これは例の通り魔だろうと思って……後ろを振り返って、言っただけだ。卑怯者の通り魔、姿を見せろ！ って……」

まさに勇猛果敢としか言いようのない行為だが、いくら待っても眼前には何も動くものはない。視界の利く、隠れようのない田んぼ道の真ん中なのに、四方八方、どこを見渡しても何もいないのだ。街灯の真下だったので、闇に紛れているというわけでもない。しかし気配と息遣いは確かに聞こえる。

さすがの山梨も怖くなった。

「な、なにか、わけの分からないものがある……そう思って走って逃げようとしたら、い、いきなり真上から叫び声が聞こえて……！」

一瞬の出来事だった。まるで猛獣のような叫び声が聞こえたかと思つと、傘は激しく斬りつけられ、山梨は傘と共に地面に叩きつけられた。そして彼女は、ずたずたに切り裂かれつつある傘の隙間から、その凄惨な姿を見てしまったのだ。

血と臓物の臭い。

その侍は傘を跡形もなくなるまで斬りつけると、満足したように吠え、闇へ消えた。

以上が、山梨が玄幽に話した全てだ。

玄幽は山梨の背中をさすりながら、警察には言ったんですか、と尋ねた。

「警察には話したよ……でもまるで信じてくれない。侍なんかいるわけない、人はいきなり消えたりしないって、必死で訴えたのに、狂人扱いだ。それで、これ以上変な噂を増やしたくないから、マスコミには言つなつて……」

そこまで話すと、山梨は机に突つ伏して泣き出してしまった。

玄幽は途方に暮れた。鬼の目にも涙、とは言葉の意味が多少異なるが、こうして眺めてみると、どれだけ強気で聡明で尊大であっても、山梨香夏子もただの同年代の少女に過ぎないのだという事を、玄幽は身をもつて感じるのだった。

窓の外は、まだ夕方だというのに夜のような暗さで、重苦しい雲からはいつ雨の雫が落ちてくるかも分からなかった。

第1話 第10章 雨の町へ

同じ頃、七塚聖は自転車に乗りながら境内を蔵へと向かっていた。砂利の上を走ることはいりく婆にきつく禁じられていたが、そのりく婆は今日は用事で出かけている。

天気予報によれば、これから夜にかけて激しい雨が降るだろうということだった。

聖は自前の真つ赤な傘を片手に持っていたが、当然、あまり乗り気はしない。

雨降りの夜に、赤い傘をさして。

「冗談じゃない、と聖は思う。

まだ通り魔は捕まっていない、否、捕まる気配すらないのだ。こんな真つ赤な傘をさして街をうろつくなんて、どう考えたって正気じゃない。

一体、多恵という女性は何者なのだろうか。

彼女と出会ってからというもの、それとなく探りを入れてはみたものの、りく婆にも多恵本人にも、実にあっさりと言われてしまっていた。

『だからあたしの古いお友達だと言っててるじゃないか。それより聖、今朝はちゃんと境内の掃除をしたのかい？ 庭の落ち葉はなんだいや、いつも言ってるじゃないかい。庭の汚れは掃除するあなたの心の汚れなんだよ！ もっとしっかりやってくれなきゃあ、』
……略。

『あははは、聖ちゃんにも秘密のひとつやふたつあるんだろう？

え？ 例えばねえ、好きな殿方とか、背中のはくろの数とかねえ……
…そうだ、こつちにおいでよ。あたいが背中のはくろ、数えてあげ
るからさあ……ふふふ、なんだい、いいからほら、着物の帯をちょ
つとほどきや、』……略。

なんだかこの二人は似ている……というのは偶然だろうが、まあ
何かを隠しているであろう事は明白だった。聖にだって、恐らくは
当事者になれば誰だって分かる。

でも、多恵さんの笑顔を見ちゃうと、何も言えなくなっちゃ
うんだよなあ……。

聖は多恵の妖艶な笑顔を思い出して赤面してしまう。

自分もあんな風になれるかなあと、短い髪をつまみでは溜息をつ
く聖も、やはり呑気な性格であった。

やがて蔵の前に着くと、珍しく多恵が扉の前に姿を見せていた。
いつもは聖とりく婆以外に姿を見せないため、蔵の中に引きこもつ
ているので、聖はおや、と思った。

「聖ちゃん、わざわざ済まないねえ」

聖を見つけてにつこり微笑む多恵は、やはりとても美しかった。

「多恵さん、本気でこれから街に？」

「そうさ、ちようど一雨来そうだしねえ」

多恵は首を傾げて空を見上げる。

白いうなじが見えて聖はまた赤面するが、首をぶんぶんと振ると、
「あの、やっぱり、やめといた方が……。その、通り魔の正体も分
からないし……」と、一応言ってみた。

多恵は、心配いらないう、ところこ笑った。

「むしろ聖ちゃん、あたいと一緒にいたら、聖ちゃんが一番安全なんだよう？」

「へ？」

聖はわけが分からないという表情だが、多恵が後ろ手に持っていたものを見ると、思わず息を呑んだ。

それは聖が持っているような洋傘ではなく、紙で作られた和傘だった。

何より、そのくすんだ朱色が、聖の目を引いた。相当の年代物らしく、豪華な造りながら、至るところに痛みが出ている。

「聖ちゃん、その傘は置いていきな。こっちの方が目立つだろ？」

……ほうら、ちょうど降ってきたじゃないさ」

空を見上げた聖の鼻先に、ぼつり、と雨粒が落ちた。そしてそれは、まるで黒雲から堰を切ったように溢れ、あっという間に本降りになった。

多恵は和傘をばさりと開き、聖の自転車の荷台にそっと乗る。

まるで人が乗ったとは思えない軽さに、聖は驚きを通り越してゾツとしたが、何も言わずに自転車のペダルを踏んだ。

多恵の持つ傘は大きく、ふたりをしっかりと覆った。

「あ、そういえばりく婆ちゃんに何も言ってないや。いいんですか、蔵から出て？」

「いいんだよ、あたいがちゃんと言ったからさ」

「はあ、じゃあ行きますよ。その通り魔、人気のないところに出るらしいので、田んぼ道を回りますね。しっかり掴まっててください」

七塚神社前の急な下り坂を、自転車は豪快に駆け下りる。

多恵はわずかに神社を振り仰ぐと、寂しげに微笑んで、小さく手を振った。

夜の闇が、深く街を覆い尽くそうとしていた。

第1話 第11章 玄幽の遭遇

また、同じ頃。

山猫村玄幽は疲れ切った顔で、山梨香夏子の自宅前を立ち去ろうとしていた。

あの後、急に降り出した雨を見て発狂寸前にまで陥った山梨を、どうにか宥めてすかして帰らせようとしたものの上手くいかず、結局玄幽が山梨を自宅まで送り届けなければならなかった。

しかも相合傘で、である。……これが、何よりも玄幽を疲れさせた。

山梨が傘というものにほとんど拒絶反応を示しており、濡れて帰らないためには玄幽の傘に入れ、彼女を随時安心させなければならなかったのだ。

元より女というものにまるで縁のない玄幽、これは少々骨が折れた。

「変な噂とか立たなきゃいいけどな……」

校舎を出る際の周囲の熱い視線を思い出し、深々とため息を吐く。鬼の生徒会長と、地味な文化部の部長。お似合いかどうかはともかく、玄幽はなるべくならば、噂であっても山梨香夏子とくつつけられるのは辞したいところであった。

玄幽は、大粒の雨を吐き出し続ける空を見上げる。

玄幽はこれから、今来た道を戻り 山梨香夏子の自宅は玄幽とは反対方向だった また長い道のりを、自宅まで歩きとおさねばならない。バスでもあればと思うのだが、そこは田舎のこと、そう

いう便利なものは一切なかった。

増して、先ほどの山梨の話聞いた後だと、暗澹たる気持ちにもなる。

厄介なことになってきたな。

恐らく、山梨だけではなく、これまでの数名の被害者たちも、その侍とやらの姿を目にしていたのだろう。しかしそれがあまりに突飛であるが故、誰にも話せないか、話しても信じてもらえなかった、ということらしい。

玄幽も正直、鵜呑みにするにはあまりにも、といった感想だった。

それに。

もし侍だとするならば、いよいよ玄幽が丹念に調べている『鈴鳴村怪異録』とは一層かけ離れてしまう。

そうなつてくると玄幽にはわけが分からず、またこの事件の謎に迫り、郷土史研究部の名声に役立てようと目論んでいるのに、あてが外れる格好になる。山梨を誘い出して話を聞いたのも、身近な事件の被害者だったということもあるが、生徒会長たる山梨に自分が事件の調査をしていることを知らしめ、軽く恩を売っておこうという腹積もりだったのだ。

しかし、もし侍だとすると、いよいよこの事件は人外の仕業だな。

そう思うと玄幽はぶるりと身震いをしてしまう。

いくら通り魔の標的が赤い傘を持った女性であるとはいえ、人ならざるモノが今この瞬間も街をうろついているかと思うと、やはり

玄幽も恐怖を感じずにはいられないのだ。そしてこの奇怪な事件に、自分が半分以上首を突っ込んでしまっているということは、玄幽を一層そわそわとさせた。

その時。

人気のない田んぼ道をぼつりぼつりと歩く玄幽は、不意に後ろに何かの音を聞いた。

思わずぎょつとして身構えるが、それが自転車に付けられているライトの発電機の唸る音だと分かるとホッとした。自転車がタイヤを滑らせる音も、後ろから段々大きくなってくる。

まったく、脅かすんじゃないよ。

そう心の中で呟きつつ、ほうつと息を吐き出し、さり気なく自分の横を通過していく自転車を見て、玄幽は思わず声を上げそうになっってしまった。

二人乗りの自転車で、巫女装束の少女が前に、着物姿の女が後ろに乗り、おまけに真っ赤な和傘をさしているではないか。もちろん、もちろんそれだけでも異様な風体ではあるのだが、問題はその後ろだった。

「さ、侍!？」

そう、少し間を開けて、その自転車に追いつがるように、まるで人とも思われない異形のモノが、袴を引きずり走り去って行ったのだ! 右手には刀がしっかりと握られ、袴はぼろぼろに破れ、そこには 血がしっかりと染み込んでいた。

思わず玄幽は傘を落とし、しばし呆然とする。雨音が遠のき、玄幽の心臓の立てる規則的で速い鼓動が、どくんどくと大きく響く。現実離れた自転車と侍の作り出す異様な空間も、少しずつ遠く、小さくなっていく……。

が、次の瞬間。

何を思ったか、傘をその場に置き捨てて、玄幽は自転車を追いかけるようにして、降りしきる雨の中を走り出したのだった。

第1話 第12章 辻斬り

一方、自転車の主は、自分たちに迫る存在に薄々気が付き始めたばかりであった。

ザリツ、ザリツ。

聖は人気のまったくない田んぼ道を一定の速度で走りながら、背後から聞こえる奇妙な音が徐々に大きくなっていることが気になっていた。初めは自転車の不具合かとおもったが、どうもそれはずつと後ろの方から聞こえてくるようだった。

「多恵さん、後ろから何か変な音が聞こえませんか？」

「え？ 後ろかえ？」

多恵は傘を少しだけ傾けて後ろを見た。そして 迫り来るその異形のモノを目にし、彼女は身を固くした。

思わず目を逸らした多恵であったが、それでも懸命にこらえるようにぎゅっと歯をかみ締め、恐る恐る、それでもしつかりと、その化け物を見た。そしてそれを目に焼き付けるように凝視すると、多恵は傘を戻し、前を向いた。

その目からは、大粒の涙が零れ落ちていた。

ああ、あんだ、こんなになっちまって……。

多恵は涙を飲み込むと、聖の背中をそつと触った。

「ねえ聖ちゃん あんだ、好きな人はいるかい」

「な、何ですか唐突に」

聖はまったく唐突の質問に顔を真っ赤に染めて、思わずハンドル

をぐらつかせる。自転車の後ろでは、侍はもうあと二十メートルと
いったところまで迫っていた。

多恵はいつにも増して優しい声音でぼつりぼつりと言葉を紡ぐ。

「あたいにはいたんだよ。ずっと昔の話さ。頑固で、生真面目で、
もうどうしようもないくらいのカタブツだったねえ。でもとっても
優しかった。人にも物にも、花にだってね」

「……」

「でもその人はね、あたいのせいで壊れちまったみたいなんだ。長
い間、本当に長い間に……、憎い人を探して、斬って、斬って、き
つと今じゃあ、自分が何を斬ってるのかさえ、分かつちやいないの
かもねえ」

「……多恵さん？ どうしたんですか、急に」

独り言だよ、と言ってころころと鈴のように笑った多恵を、訝し
い思いで背中に感じている聖であったが、それ故に、突如とし
て、降るように目の前に現れた影に対する反応が、一瞬遅れた。

「うわわわっ!?!」

聖は慌ててブレーキペダルを握る。

ブレーキ音とタイヤがスリップする音が響き、次の瞬間には自転
車がひっくり返ってしまった。多恵と聖は投げ出されるようにして
コンクリートの車道に転がる。

自転車の車輪が立てるカラカラという硬質な音と、叩きつけるよ
うな雨音で世界が満たされた。

「あ、痛ったたあ……多恵さん、大丈夫ですか……っへ!?!」

聖は言葉を失った。

侍、先ほどまで聖たちの自転車を追いかけていた侍が、いつの間にか二人の目の前に立っていた。

その狂気の形相は、凶暴さと執念を練って固めたような、とても不細工なものだった。

口の端からは涎とも血ともつかぬ何か絶えず零れ落ち、身体は全体が小刻みに震えている。手に握った刀からは、何を斬ったのだろう。絶えず血が、流れ落ちてくる。

およそ言葉に表すことのできない強烈な腐臭が一体に漂う。

な、なんなのこれ……。

悲鳴すら上げられず、聖はその場へたり込んでしまう。

しかし、その侍の視線は一向に聖を捉えない。侍が一心に見下ろしているのは。

「……多恵さんっ!?!」

侍は、ただ一心に、多恵を見下ろしていた。

多恵は、放心したように、それでいて何か見惚れているような、奇妙な表情で侍を見上げていた。

侍はといえば、その顔がどんどん歪んで、もはやそこにどのような表情が読み取れるのかがまるで分からない。

侍は、間近に転がっている赤い傘には目もくれない。

多恵は、聖の方を一瞥すると、にっこりと笑った。

おりくちゃんに、よろしくね。

聖には、その口が、そう言ったような気がした。

雨が、より一層強くなった。

雨粒の音が聖の耳の奥の方までしっかりと響いた。雫が聖を叩き、侍を叩き、多恵を叩く。侍のたてる不快な呼吸音。自らの息遣いさえも飲み込む雨音の波、波、波……。

「駄目っ！」

聖は地面を蹴った。

聖には分かったのだ。こいつは、この化け物は、多恵を斬ろうとしている。傘だけじゃなく、いや、傘ではないのだ、多恵そのものを、ずたずたに切り裂こうとしている！ そう考えると、身体は勝手に動いた。

聖は多恵を庇うように覆いかぶさると、侍に向かって声を張り上げた。

「多恵さんを斬っちゃ駄目ええええっ！」

まるで時間が止まったようだった。

多恵に覆いかぶさっている聖には、見えなかったのだが、この時、多恵と聖の顔を同時に見た侍の顔には、ひとつの明確な表情が浮かんでいた。憎しみが渦を巻いている中に、それはしっかりと浮き出ていた。

……困惑。

多恵はその表情を見て、心の中で、そうだよねえと呟いた。

そりゃ、そりゃだるるんや。

第1話 第13章 三つ巴

刹那か、永遠か。

雨音すら遠のき、停止したままの三人の世界に、
突如として、
怒号が響いた。

「うおおおおおおおおおおおっ！」

一閃。

侍が、横っ飛びに思いっきり弾けとんだ。

ほとんど身体に力が入っていなかったらしい侍は腰からぐにやりと折れるようにして傾く。

まさに不意打ち、腰の辺りに食らわされた鋭い蹴りに、侍は呻きながら地面を転がる。

怒号と蹴りの主は、その勢いを借りて更に侍に追い討ちをかけようとするが、侍がすぐに飛びのいて立ち上がったのを見て、侍から距離を取り、そこに仁王立ちになった。聖と多恵の前に立ちふさがるようにして、侍と対峙する。

「はあ、はあ、……てめえ、てめえが噂の通り魔かつ！」

学ラン姿のその男、
山猫村玄幽は、息も切れ切れにそう声を張り上げた。

突然の闖入者に、多恵も聖も目を丸くして玄幽を見上げている。

「なんとか言ってみろっ！」

玄幽は腰を落とし、威勢よく声を張り上げる。
まるで自分のものとも思えない勇ましい声に玄幽は胸を張った。

侍は玄幽の一撃が効いたのか効かなかったのか、先程までと同じ呆然とした表情で立ち尽くしている。ぐにやりと曲がったように見えた腰も元通りになっている。ゴムのように不確かで柔らかな身体を持っていてようであった。何より、
困惑。今やそれは、怒りや憎しみよりも、ずっと顕著に侍の顔を、全身を覆っていた。
もっとも、侍のその「動揺」にまったく気付かない玄幽は、その異様な風体に気圧されまいと歯を食いしばって立っていた。

どれだけ時間が経つたらう。

せいぜい二十秒かそこらであつたが、玄幽にはそれが数十分のよう
に肌身に染みて感じる時間の長さであつた。

こ、怖ええ。

ここにきて玄幽の頭も冷めてきた。

見れば見るほど、その侍の不気味さが、ゆっくりと足元から這い上がってくるように玄幽には感じられた。どうしてそんな紫色の肌をしているんだ？ 落ち窪んだ目に目玉が入っていないように見えるのは気のせいか？ 玄幽は眼鏡が雨の雫で曇っていて本当に良かったと思つた。ぼやけて見えてさえここまで恐ろしいものを、しっかりと正視してしまつた日には……。

玄幽と侍との距離は、わずかに三メートル。

格闘技経験などない玄幽だが、この距離の危険さは十分に理解できる。

加えて、素手と刀ではそもそもまともにやりあえないことも、もちろん理解できた。

不意打ちで決められなかった……というか、ちょっと考え無

しすぎたんじゃ……。

冷たい雨によって無理やり冷静にさせられた玄幽。その顔に、徐々に焦燥が募り始めていた。

しかし侍とはいえば、顔面蒼白で次の一手を考える玄幽などまるで無視して、ひたすら聖と多恵にその視線を注いでいた。

聖の白い横顔、多恵の端正な細面。

そして不意にそのおぞましい気配を引かせると、身を翻した。

翻した次の瞬間には、その姿は無かった。

残されたのは、ぽかんと口を開けた玄幽、多恵をしつかりと抱きしめてい震えている聖、表情のない多恵、そして横倒しの自転車だけだった。

その隣に無傷の赤傘も転がっているが、侍の刀から滴り落ちていた血は、跡形も無く消えうせている。

雨足が弱まり、まるで夢から醒めたかのように、三人は顔を見合わせた。

第1話 第14章 濡れ鼠

「おやおや、こいつは大きな濡れ鼠だねえ」

蔵の戸の前にひとり佇んでいたりく婆は、ずぶ濡れで帰宅した聖と多恵、そして玄幽の三人を見てにっこりと笑った。

その顔を見て、あるいはこの人は自分の抜け駆けを知っていたのかも知れないと、多恵はなんとなく気恥ずかしいような気がして、思わず苦笑してしまう。

三人は銘々、りく婆が用意したタオルで身体を拭いた。

冷たい雨に打たれた三人の身体はすっかり冷え切ってしまった。た。

玄幽は女性と一緒に着替えるのがなんとなく気まずくて、一人だけ蔵の外でジャージに着替えたが、聖にも多恵にも、そんなことを気にする余裕などないようだった。あんなことがあった直後のことだ。あの田んぼ道から神社に至る道すがら、三人は名前を交わしたくらいで、ろくに会話らしい会話もなかった。

もちろん彼にしても、冷たく震える頭で、あれは何か幻覚のようなものだったのではないかと思う気持ちもあった。

でも、俺はあの時、あの侍を……。

無我夢中で侍に追いつき、そのわき腹に強烈なとび蹴りを食らわせた感触を、玄幽はしっかりと覚えている。どう考えても人外の容姿をしていたにも関わらず、玄幽がその足に感じたのは、ぐにやりとした、肉の感触だった。

だったら、あれは人なのか？ いや、そんなはずは……。

「山猫村さん、といったかね」

玄幽ははっとして我に返る。他の二人は既に着替えを終え、火鉢に手をかざしていた。

「あんたもこつちで火に当たりな。そのまんまじゃあ風邪を引いちまうよ」

りく婆の手招きに、ジャージ姿の玄幽も蔵に入り、火鉢の傍に腰を落ち着けた。制服は蔵の天井から伸びる紐に干されている。火鉢の火は強くもなく弱くもなく、身体の芯を直接温めてくれるようだった。

その火鉢をつつきながら、りく婆は心底ホツとしたようなため息をついた。

「まったく……、聖の姿も見えない、蔵の中にも誰もいないとくりゃあ、まあ予想もつくけれどね。あたしを除け者にするなんて、ちよつとひどいんじゃないかい」

苦笑する多恵と、相変わらず俯いたままの聖を軽く睨みつけると、りく婆は玄幽に優しいげな笑顔を向けた。

「あんたが二人を助けてくれたんだってね、さっき聖から聞いたよ。最近の若いのにしちや、随分と骨がありそうじゃないか。とにかく、ありがとうね」

「はあ」

玄幽はあいまいに頷いた。

そもそも玄幽は咄嗟のことで、なぜ自分が侍の後を追ったのかすらほとんど自覚していなかった。

それよりも彼には、目の前にいる三人の奇妙な組み合わせを疑問に思っていた。なぜこんな薄ら寒い蔵にひっそりと籠っているのだらう？

玄幽は改めて、聖と多恵に目をやる。

聖はぶかぶかのジャージに身を包み、何を思っているのか、じつと火鉢を見つめている。短く髪を切つて、一般的な巫女のイメージとは違つていたが、その顔は子供ながらに美しさを備えているように玄幽には思えた。多恵はといえば、薄っすらと笑みを口元にたたえながら、どこを見ているのか、遠い目で玄幽の正面に座っていた。不思議な女性だ。こんなに近くに居るのに、驚くほど存在感が薄い。多恵は着替えていなかったたので、濡れた着物が妙に艶かしく見えて、玄幽は慌てて目を逸らした。

「あの人、多恵さんを殺そうとしてた」

ぼつり、と聖が口を開いた。

「私には分かったの。あの方は赤い傘なんて見てなかった。じつと多恵さんのことを見てたの。多恵さんのことを今にも斬り殺そうとして、私、私……」

小刻みに震えだす聖の背中を、多恵がゆつくりと撫でる。

「でも、だとしたら……あれは通り魔じゃないってことか」

玄幽はいかにも得心がいかないという顔で腕を組む。

「今までの通り魔は赤い傘だけを狙つて、赤い傘だけを切り刻んで終わりだったんだ。なのにどうして、その、多恵さんを斬ろうと思つたんだらう？ それに、言っちゃあなんだが、あれはどう見ても人には」

多恵？

玄幽はそこで稲妻に打たれたように目を見開く。

そして正面の多恵を、信じられないといったような顔で見つめる。

いや、そんな……そんなわけが。しかし、侍の化け物は確かにいた。ならば……。

玄幽は震える手で鞆を手繰り寄せると、その奥に仕舞いこんでいた『鈴鳴村怪異録』を取り出した。鞆はずぶ濡れだったが、古書はなんとか雨に濡れることは免れていた。

そしてそれを見るや否や　りく婆と多恵の顔が見る見るうちに驚愕の色に染まっていった。

「あ、あんた……そいつをどこで!?!」

りく婆はひつたくるように『鈴鳴村怪異録』を玄幽の手から取り去ると、勢い込んでページを捲った。ばさりばさりと、そう数はない全てのページを何度も何度も、丁寧に捲っていく。そんな様子を、聖と玄幽は呆気にと取られて眺めていた。

「　　ない」

りく婆はページを捲るのを諦めると、そう呟いた。そしておもむろに多恵の顔を見やる。

多恵は、　　につこりと、笑っていた。

「分かってたよ、おりくちゃん。今度ばかりは本当だってね……なんとなく感じたのさ、この街のどこかにあの人がいて、あたいの事を探してるってね。聖ちゃんと街に出たのは、それを確かめに行きたまでさ」

「違うだろ!?　　そんで、斬られちまってもいいって思ってたんじゃないのかい!?　　あたしに何も言わずに……!!」

「おりくちゃん」

多恵は、やんわりとたしなめるように首を振った。

「知ってるだろう？ あたいはもう、とっくの昔に死んでんの
わ」

第1話 第15章 顛末

雨はいつの間にか上がり、ぼつかりとした月が、唐突に雲の隙間から現れた。

その月明かりに誘われるように、多恵は蔵の戸を押し開けると、まばゆい光の中に舞い降りた。

そして、まるで糸をつむぐ様に、噛んで含めるように、話し始めた。

「あたいはずうつと昔に死んでんのさ。もう数えるのも嫌になっちゃうくらい、ずっとずっと昔にね」

そこで多恵は聖や玄幽に向かって首を傾げる。

「あんたたち、驚かないんだねえ」

そういえば、といった風に玄幽と聖は顔を見合わせると、苦笑した。

二人ともが、あんなものを間近に見せ付けられた後では、どんなことでも信じられるような気がしていた。

多恵は穏やかな視線を玄幽に向ける。

「山猫村さん、といったね。あんたが持つてるその本、半分までは合ってるんだけどね、後の半分が見事に間違ってるのさ」

「え？」

「おみきさんはね、確かに多恵 あたいを殺したんだ。婚礼の前の晩、井戸に放り込んでね。そこまでは合ってるよ。でもそっから違う。おみきはね、与右衛門さんとは結ばれることはなかったんだよ。そのまんま村を逃げて、尼寺へ入っちゃったのさ」

「ま、待ってください。それではお多恵さんの幽霊が出るというのは？」

「はははっ、そんなもんは真っ赤な嘘、出鱈目さ。出るのは多恵でもおみきでもなくってね　与右衛門さんなんだよ」

多恵は目を細めた。

「……おみきが横恋慕してるのなんて、村中が知ってたのさ。それで、お多恵がいなくなつて、次いでおみきもいなくなつたって事はさ、そんなのひとつしかない。おみきが多恵を殺して街を出てつた、すぐに知れたのさ。井戸の底の亡骸だつて、次の日には見つかつてる」

「それで、どうしてお侍さんが出てくるんですか？」

聖が分からない、といった風に尋ねた。

「だつて、お侍さんは何の関係もないんじゃない……」

多恵は首を振った。

「関係なくはないさ。自分の嫁を殺されて、与右衛門さんは気が狂つちまつた　元から漬物石みたいに頭の固い人でね、こつ、タガが外れちまうと、もう歯止めがきかないようなところがあつてさ。

多恵が死んでからしばらくした、雨のしとしと降る晩ね。与右衛門さんは家を飛び出して、おみきがいつも差してた真っ赤な傘……：そいつだけを目印にして、斬って斬って斬りまくつたのさ。街を越え、街道を走り、夜が明けても、ずっと　そして仕舞いに、お役人とつつかまつて、その場で首をはじかれた」

それからだよ、あの人が祟つて出るようになったのは　。

月はいよいよ明るく、多恵を頭上から照らした。その多恵の足元に彼女の影がないことに、玄幽と聖はようやく気付いた。

「山猫村さんのその本　それは物語でもなんでもない、物語の形をした、言ってみりゃ『封印書』なんだよ。あんだ、そこに御札が貼つてなかつたかえ」

「……あ」

あの御札か。

多恵はにつこりと笑った。

「そう、そいつに封じ込められてたのが、あのお侍、与右衛門さんさ。どっかの偉い坊さんがね、あんまりに惨い話だつてんで、彷徨つてる与右衛門さんとお捕まえて、御札に封じ込めちまったのさ」
「じ、じゃあ、話の内容が違うのはわざと……?」

多恵は何か思い出すように目を瞑ると、おかしそうにくつくつと笑う。

「……さあねえ。事実と違うことを書いて、与右衛門さんを騙そうとしたのかも知れないね。もう与右衛門さんときたら、右も左も分からない狂乱振りだったからね」

多恵は人を恨むような娘じゃないってのにねえ、ひどい話だよと言って、彼女はひとしきり笑った。

その姿は本当に美しく、また儂げに霞んでいるようだった。

「その古い本はね、元はこの神社にあったのさ」

言葉を継いだりく婆の表情は、何かだやりきれないといった風に玄幽には見えた。

「きちんと本殿の奥に祀られてただけだね、どういう経緯かは分からないが、あなたのところに行っちまったみたいだね」

「なるほど……」

頷いてみせる玄幽だが、何かが頭の奥で引っかかっているのを強く感じていた。

分かるような、分からないような……。

玄幽は散らかった机を片付けるような気持ちで、少しずつ物事を整理する。

「多恵さん、あなたが誰かを恨むような人じゃないっていうんなら

じゃあ、あなたは何故、ここにいます?」

多恵は軽く目を伏せた。

そして大きく息を吐いて、あははと笑った。

「さあてね　そんなことももう忘れちゃったね。ずうつと長い間こうしてるんだ。気が付いたらあたいはその赤い傘に取り付いちまって、離れようにも離れられないのさ」

そしてりく婆に親密な視線を送る。

「おりくちゃんは不思議な子でね、小さい時からあたしと話が出来た。あたしと、というよりは、傘に閉じこもってたあたしだね。蔵で何かぶつぶつ言ってるってんで、おりくちゃんのご両親はさぞ心配されたらうけどね」

りく婆は軽く俯いたままだ。微笑んでいるようにも見えるし、物悲しそうにも見える。

「それでもね、ついこの間さ、あたいがこの姿で　生きてた頃の姿で、蔵に座ってたのはさ。何でなんだろうって、あたしも本当に驚いたよ。おりくちゃんと色々相談したんだ。きっと　よくない事がある、前触れなんじゃないかってね」

「それで、私に調べて欲しいって言ったんですね」

「そうさ、聖ちゃんなら大丈夫だろうって、あたしも思ったんだ。そして思った通り、事件は起こった　そしてあたしも悟ったんだよ。あの人はあたいを探してる、あたいのことを連れて行こうとしてるんだってね……」

それが、この事件の全て　。

「じゃあ、あのお待さんは、多恵さんを殺そうとしてたんじゃなく、連れて行くこうとしてたってこと……？」

「そうなるねえ。でも聖ちゃん、あなたが間に入って来て良かったよ。お陰でこうして、最後にちゃんと、おりくちゃんにも挨拶が出来たんだ」

……最後。

その言葉が、やけに大きく響いたような気がして、玄幽は唇を噛む。

自分さえ、封印を解かなければ、今回の事はなかったかもしれないのに。

そんな玄幽の心を読んだのか、多恵は玄幽に近づいて頭をそっと撫でる。

「山猫村さんには本当に感謝してる。下手したらあそこで、聖ちゃんも切られちゃったかもしれないんだ。あたいまちよつと軽率だった」

玄幽の心中を見透かしたように、多恵はにっこりと微笑んだ。

「これであたいもあの人も、やっと、長い呪縛から解放されるんだ。この『偶然』に、あたいは本当に感謝してるんだよ」

この時。

りく婆が何かを口にしようとして、結局つぐんでしまったのを、聖も玄幽も気付かなかった。

第1話 第16章 束の間の安寧

赤い傘をめぐる奇妙な事件は、静かに終息を迎えようとしていた。

それからしばらく晴れた日が続いた。

雨の気配はなく、空はからっと晴れ渡っている。

十二月の風はいよいよ本格的な冬の匂いを漂わせ始め、山の葉は隅々まで紅葉し、年の瀬の高揚は今まさに、次の年へと静かに移り変わろうとしているようだった。

玄幽と聖と多恵は、すっきりと晴れ渡った空を眺めながら、蔵の前でお茶を飲んでいた。

湯飲みから立ち昇る親密な湯気があたたかい。

「ほおら、できあがりだ」

聖の短い髪をあれこれいじっていた多恵は、手をパン、と叩くと、聖に手鏡を渡してみせる。

鏡の中に映る自分を、聖は信じられないといった顔で眺めた。

「きれい……」

聖の髪には、きれいなベツコウ塗りの髪飾りが付いていた。短い髪の、かろつじて長い部分に付けられたそれは、しかし無理やりに付けたという印象はなく、実に自然に聖の頭に収まって見えた。

「どうだい、その髪飾り。あたいのとつておきだよ。聖ちゃんは顔が可愛いからねえ、本当によく似合う。玄幽さんもそう思うだろ？」

玄幽はすっかり見惚れてしまっていて、よく聞き取れない声でボソボソと何か言っていると、顔を逸らせてしまった。

多恵はおかしそうにくつくつと笑う。

「若いねえ、お二人さん。聖ちゃんも顔真っ赤だよ。玄幽さんも、そういうところ、あの人にそっくりだね」

「あの人……って、与衛門さんですか？」と尋ねたのは聖である。

「そうだよ。なんだか不器用な人でね、そのくせ責任感だけは強かった。悪いことを見過ごせなかったんだね。玄幽さんもそういうところがあるじゃないさ。あの日、あたしらを助けてくれた時も」

「あ、あれは、何がなんだか自分でもよく覚えてなくて……」

玄幽は照れくさそうに鼻の頭を掻いた。

「ただ、あのお侍、……与衛門さんの後姿は……怖いというより、物悲しい感じがしたんです。必死で、切実で……、なんだか、放っておけないっていうか。まあ、よく分かんないんですけど」

多恵は小さく頷くと、庭を眺めた。

スズメが数羽、砂利の間をせつせとついばんでいた。

「……ありがとうね、お二人さん」

多恵は二人に微笑みかけた。

「あたいなんか、こんな穏やかな時間を送れるなんて、思ってもみなかった。暗くて惨めな場所で、ずっと過ごしていくんだと思ってたよ」

そう言うと、多恵は聖と玄幽に手を伸ばした。

彼女の右手が玄幽に、左手は聖に、そつと触れた。

「あたいは、あんたらのことを忘れない。あんたらも、あたいのことを覚えておいておくれよ。想いを捨てきれないで、何百年も逝くのが遅れちまった、馬鹿な女のことをさ」

「多恵さん……本当にいつっちゃうの？」

聖が悲しげに目を伏せる。

「他に、与衛門さんを鎮める方法があるんじゃない……」

多恵はやりわりと首を振った。

「ないんだよ、聖ちゃん。あの人はあたいが連れて行くしかないんだ。あたいのせいでこうなっちまったんだからね」

「……明後日には、雨が降るそうですよ」

玄幽が言った。手には、多恵の確かな温もりがあった。

自分を責める気持ちは、まだ消え去ったわけではない。

けれど玄幽にもなんとなく分かっていったのだ。こうなるしかない

のだと。

多恵は頷くと、そつと両手を引っ込めた。

「また、街へ連れて行っておくれ。そこであたいは、あの人を連れて行くよ。あの人も、それを望んでいるはずだからさ」

玄幽、聖。

二人を交互に見比べて、多恵は言った。

「あんなたち、これからもう少し大変かもしれないけど、仲良くやるんだよ」

二人は顔を見合わせると、しっかりと頷いた。

二人がその「大変」の意味を知るのは、もう少し先になる。

今はまだ、玄幽と聖に見えているものは、ほんのわずかでしかなかった。

第1話 第17章 最後の雨降り

その日がやってきた。

西の空が陰り、開け放した窓から入ってくる冷たい風が、ゆつくりと玄幽の頬を撫ぜる。

湿り気を帯びたそれは、どちらかといえば春の終わりに吹くような物悲しさを帯びているようだった。

終業式を明日に控え、クラスメイトたちが軽い足取りで教室を去っていく中、玄幽はただ一人、窓の外に垂れ込める低い雲を、ぼんやりと眺めていた。

これで、良かったのだろう。

あの日、多恵が言ったことを頭の中で反芻してみる。

「ねえ聖ちゃん、悪いんだけどあんた、またあたいを、あの場所に連れて行っておくれ。ジテンシャって言うのかい、あの車に乗せて、与衛門さんに切りつけられたあの場所にさ。あそこなら人目もないだろうからね。玄幽さん、あんたも来てくれるね？ あんたにも見届けて欲しいんだよ。あたいの最期をさ」

玄幽はその時の、一片の曇りもない多恵の笑顔を、その眩しい輝きを思い出していた。

これでやっと、二人は結ばれるんだ。

与右衛門と、多恵。共に非業の死を遂げた二人が数百年の時を経て。

でも……。

聖やりく婆の寂しそうな微笑を思い出して、玄幽はやはり、迷った。多恵さんはいつまでも、いつまでも漂っているべきなのか……、それとも、今日。

迫り来る雨の匂いに、玄幽の胸は締め付けられるように、震えた。

玄幽の吐く息は、いつかの朝のように、ほうっと白くなった。

窓を閉めると、玄幽は鞆を担いで、気付けば誰もいなくなっていた教室を後にする。

人気のない教室は寂しい。人がいるべき場所に人がいない光景は、それがどんな場所であれ、寂寥感を煽るものがあった。

坂の下では、巫女装束の聖がひとり、玄幽を待っていた。

髪には例のべっこう櫛。

ぺこりと頭を下げる聖の頭上で、そこだけが夢の続きのように鈍く光っていた。

「山猫村さん、改めて、あの時はありがとうございました」

道すがら、聖は改まった声で言った。

「あの時はあんな状態で、その後もきちんとお礼も言えないで……もしかしたら私、あそこで多恵さんと斬られていたかも知れないんですよね」

「いや、礼ならいらぬよ。もともと、この事件は俺が発端みたいなものだし、却って悪いことしちゃったって思ってるんだ」

「ううん、そんなことない」

聖は首を振って、足元の小石を蹴った。

「私、不思議だけど　多恵さんに会えてよかったって思う。お化けみたいなものだって分かってても、私、多恵さんのこと怖くなかった、むしろ本当に好きになれたもの」

だから、今日はとっても寂しい。

「……………」
沈黙が二人の間に流れる。

ややあつて、聖が取り繕うように笑った。

「それにしても多惠さん、良かったです。本当に。好きな人と一緒に
なれないまま、永遠に彷徨うなんて、私だったら嫌なもの」

「うん。俺もそう思う。でも……………」

彼女を横目に見ながら、玄幽は思案顔で顎に手をやる。

そして頭の中にわだかまっていたいくつかの疑問を、小石でも並
べるみたいに、慎重に吐き出してみる。

「しかし、……………どうして侍は多惠さんを斬らなくちゃならないんだ
ろう」

「え？」

「だって、わざわざ斬る必要なんてないじゃないか。二人一緒にな
って、それで成仏すれば問題はない。そうだろう？」

「それは、……………与右衛門さんが、混乱しているからじゃ……………？」

「でもあの時、聖ちゃんが庇っていなかったら、与右衛門さんは多
惠さんを切っていたんだろう？」

玄幽ははた、と立ち止まる。

頭の中で何かが、何か良からぬものが音を立てて回り始める。

「……………それだけじゃない。多惠さんは、なんだって赤い傘なんか
憑いているんだ？ 赤い傘っていえば、多惠さんを殺した、おみき
ってという人の愛用だったんだろう？」

そうだ、と玄幽は思う。

多惠が成仏することは良い事であるはずなのに、玄幽が釈然とし
ないのは、そこに符合しない点がいくつも残っているからなのだ。

数々の疑問点が置き去りにされたまま、全てが整然と、当たり前のように、終了しようとしている。

噛みあわない歯を、無理やり押し合わせたような。

まさか。

互いの頭の中に同じ疑惑が浮かんでいるのを確かめるように、二人は顔を見合わせる。

その時、不意に、雨雫が地面を打った。

「……！ 聖ちゃん、急ごうー！」

「は、はいっ！」

雨は、まるで二人を嘲笑うかのように、あっという間に本降りになった。

第1話 第18章 暗い蔵

無我夢中で走るうちに、玄幽も聖もいつかのようにならず濡れになっ
てしまっていた。

玄幽の髪はべったりと頬に張り付き、聖の足の草履は泥だらけにな
ったが、二人ともそんなことは気にも留めなかった。

学校の前の坂を駆け下り、田んぼ道を通り過ぎ、七塚神社の境内
まで……。それがどれくらいの間であったのか、二人にはよく分
からない。とにかく気がついた時には、二人は七塚神社の境内を横
切っていた。

吐く息だけじゃない。

たたきつける雨もが白く煙って、街はまるで大きな雲に覆われて
しまったかのようだ。

山から這うようにして下りてきた冷気が、世界の音という音を吸
い込んでしまったかのように、静けさだけがやけに大きい。

蔵の戸は、ぽっかりとした暗い闇のように、不吉に開け放たれて
いた。

「多恵さんっ！」

二人は息もろくに整えず、走ってきたその勢いで蔵の中に駆け込
んだ。靴を脱ぐことも忘れていた。

そしてそこに座って煙草でもくゆらせているのであろう多恵の姿
を探した。ほっそりとした細面が素っ頓狂な声を上げて、自分たち
を笑い飛ばしてくれると信じていた。

蔵の中には誰もいなかった。

そこにはまるで気配というものがなかった。

多恵の作り出す親密で穏やかな空気はもうどこかへ消え去り、元の雑然とした薄暗い蔵に戻ってしまっていた。

多恵の煙草盆も、煙管も、そして寄り代であった赤い傘も、まるで最初からなかったように、消えうせていた。それらが最初から、ただの夢のしるしのようなものに過ぎなかったかのように。

雨音が蔵を叩く音が鈍く響く。

おかげで蔵の中の静けさが一層際立つ。

「た、多恵さん……」

聖は荒い息のまままで必死に多恵の姿を捜し求めたが、それは無意味だと程なく悟った。そして冷たい床に膝をつく。

多恵はここにはいない。

そしてもうここには戻ってこないのだ。

「先に行く、ってさ」

みしり、と床がきしむ音がして二人が振り返ると、そこにはりく婆が立っていた。

「お婆ちゃん……どうして止めなかったのっ！」

聖が立ち上がり、りく婆に詰め寄る。

「ここにいれば、まだ止められたかもしれないだよ！ 多恵さんは、彼女はもう……ここから出てしまったら……！」

その剣幕はこれまでの聖には見られ無かったものだ。しかしりく婆はまったくひるむ様子を見せず、ぐっと押し黙っている。

そこにはある種の覚悟がある。その目は暗いけれど、それでもはつきりとした意思の光を宿している。

りく婆は何かを決めたのだ。いや、あるいはずっと前から決めて

いたのか。

とにかく、そこにあるものが諦念ではないということは、二人にも分かった。

「……自転車は裏でしたね？」

そう訊くと、りく婆が頷くの待たず、玄幽は地面に飛び降りて神社の裏へ走った。

とにかく行かなければならない。

玄幽は思った。

彼女は一人で行ってしまったけれど、それは止められるのを恐れただけで、きつと俺たちに来てほしいと思っっているはずだ。多恵は言ったのだ、自分の最後を見届けてほしいと……。ならば、ここでこうしているわけにはいかない。

「聖ちゃん、乗って！」

自転車に乗って蔵の前まで戻ると、聖に呼びかける。けれど聖は動かない。

「急ごう！ 約束したじゃないか、俺たちが多恵さんの最後を見届けてあげるんだって！」

これから先に待っているものは、辛い光景でしかないかもしれない。

でも、だからこそ。

りく婆はずぶ濡れの玄幽に向かって軽く頬を緩めると、聖の肩に手を置いて、言った。

「あの娘のこと、よろしく頼むよ」

聖は肩に置かれた手のぬくもりを感じる。そしてそれがもつ多恵に届くことのないぬくもりであることを想う。

何気なく髪留めを触る。つやつやとしたその思い出が、まだしっ

かりとそこにあることを確かめるように。

聖は小さく、しっかりと頷くと、自転車の荷台に飛び乗った。

二人を乗せた自転車が、白く煙る境内の鳥居を遠くに消えるまで、
りく婆はずっとこらえていた涙を、そっと流した。

第1話 第19章 彼女の正体

人と人が死に別れるなら、静かに、穏やかに別れるのが望ましいのだろう。

けれど時として、その別れは暴力的にやってくる。

それを報いと考えることも出来る。あるいは世の中に数多ある、どうしようもない原理のひとつであるとも。

しかしいずれにしたところで、別れは別れに過ぎないのだ。

雨をその身に受けながら、鈴鳴の町をひた走る二人に、その別れの覚悟があっただろうか。

……………。

玄幽と聖の視界のずっと遠くに、あの時のあの場所がぼんやりと浮かび上がってきた。与右衛門と初めて遭遇した畦道の一角。電灯の灯りがその一帯だけを浮かび上がらせて、白く煙る夜の初めから幻想的な風景を切り取っていた。そしてその淡い光は、そこに佇む一人の女と、彼女がさしている真っ赤な古傘も照らしていた。

「よし、間に合った！」

玄幽の声に、後ろにしがみついた聖の手にも思わず力が入る。

彼女がまだいる、そのことが何よりも重要だった。そしてそれに付随する様々な問題は、今は少しだけ視界から外しておきたかった。

でもそれは叶うことはなかった。

近づいてくる自転車の音に、女は傘をちらりと上げて、こっちを見る。

口元には心の底から湧いてきたような微笑が浮かぶ。

そして彼女が片手を上げようとした次の瞬間には、彼女の後ろに暗い影が、唐突に、降って沸いたように佇んでいた。

与右衛門。

そして与右衛門は、今度こそ満身の力を込めて、激しい想いを載せたその刀を振り上げた。

間に合えっ！

玄幽はペダルを漕ぐ足に最大限の力を込めた。

全ての景色ががゆっくりと流れていった。

音が近づき、遠ざかり、ずれてぐるぐると世界を回る。

彼女はすぐそこにいるのに、こんなにも遠い。

「多恵さん、多恵さん！ 『おみき』さんっ！ 駄目え、逃げ
てっ！」

聖が悲鳴のような声を上げる。

おみきさん。

多恵は、それを聞いて目を丸くした。

そしてまるで、まるで 悪戯を見つかってしまった子供のよう
な笑顔を浮かべた。

その顔を見て、玄幽も聖も、あやふやだった疑問の答えを、はっ
きりと理解した。

「行っちゃ駄目だ！ おみきさんっ！」

自転車が光の領域に入る。

振り上げた刀が振り下ろされる。

彼女はまだ微笑んでいる。

自転車ごと突っ込む……玄幽がそう決めて、ペダルの最後の一踏みに力を注ぐ。けれど与右衛門の刀が、彼女 おみきを傘ごと激しく斬りつけたのは、その一瞬前のことだった。

「やめてええええええええっ！」

血飛沫が、ぱつと広がった。

それは、白と闇だけで構成された夜に、鮮やかに飛び散った。

与右衛門は玄幽に自転車ごと弾き飛ばされ、血濡れの刀が勢いよく転がっていく。

聖は自転車から駆け下りると、崩れ落ちようとする彼女を危うく抱き止め、しつかりして！ と声をかけるが、その眼の焦点は既に定まってはいない。

女……おみきは乾いた声で笑った。

「……っ、よく、分かったね……あたいが……みき、だって」

「喋らないで！ 今、医者を呼ぶから！」

「っははは……何言ってるんだい、あたいはもう死んでんのさ……医者なんて呼んでどうしようってんだい」

「なんでっ……なんでこんな嘘をつ！」

嘘 おみきが、名前を偽って、多恵と名乗っていたこと。

おみきはそれには答えず、虚ろな目で聖を見上げた。

自転車を捨て、二人を庇うように立っている玄幽の向こうでは、与右衛門が刀を握りなおして立ち上がったところだった。

その表情に見えるのは、かつて愛した妻、多恵への愛なんかではない。それはもう玄幽にもはつきりと分かる。

それは想い人を殺した女……おみきに対する、明確な憎悪だ。

おみきは、遠ざかる視界の中で、与右衛門の顔を見た。かつて自分が愛し、また己が醜く歪ませてしまったその顔を。

多恵さん、そろそろ行くよ。

やがて、おみきは力を振り絞って聖の耳元に口を近づけると、ほとんど聞き取れないような声で、何事かをそつと話した。

聖はそれを聞くと、思わずおみきの顔を見返す。

そしてそこに浮かんでいる穏やかな表情を見て、ようやく、全てを理解した。

ああ。そうなんだ。

こうなるしか、なかつたんだ。

おみきをそつと地面に横たえると、聖は毅然と立ち上がり、玄幽の前に立つ。

「お、おい！ 聖ちゃん！」

慌てて押し戻そうとする玄幽に、きつぱりと首を振って、聖は与右衛門と向かい合う。

彼の顔にまたも浮かんだ困惑の表情を見据えて、聖は大きく息を吸い込んだ。

そして、柔らかい、優しい声音で、与右衛門に語りかけた。

「 与右衛門さん。多恵は、…… 『私』 は先に、もうずっと先に、向こうで待っています。長い間、本当にお疲れ様でした。もう 聖の頬を、涙が伝う。」

「 もう、いいんですよ。与右衛門さん…… 」

瞬間。

辺りが、光に包まれた。

与右衛門の、その醜悪な顔が、血濡れの袴が、ぼろぼろの刀が、一瞬だけ、元あった姿を見せた。何百年の昔、彼がまだ化物に成り果てていなかった頃の姿に。

おみきも、柔らかな光に包まれて、背中傷はみるみる消え、服装もずつと絢爛な江戸紫を取り戻していく。

ありがとうね。

そんな声が聞こえたような気がして、聖と玄幽が天を仰ぐと、光は消えた。

与右衛門の姿も、おみきの姿も、既に掻き消えてしまっていた。

ただ、玄幽と聖のすぐそばに、大きく斬られた古い朱塗りの和傘が、誰かの無邪気な置き土産のように、さり気なく転がっているだけだった。

聖は泣いた。

立ちすくんだまま、幾筋もの涙が頬を伝っては落ち、地面の染みになった。

「……雪だ」

玄幽は顎を上げる。

空から、ゆつくりと、軽やかに、大きな雪片が零れ落ちてきた。

まるで、まるで数百年も待ちかねたといった風に、一斉に、何かを悼むように。

玄幽は手をかざし、それを手の平に受けると、その手で、聖の頭を撫でた。

第1話 第20章 終り、あるいは始まり

「そうかい……、逝ったかい」

神社の前で佇んでいたりく婆の傘には、うつすらと雪が積もっていた。

りく婆は、目を真つ赤にした聖をそっと抱き寄せると、頭を優しく撫でる。

「全部、知ってたんですね」

責めたわけでは決してないのだが、玄幽の声に少し非難がましいものを感じ取ったのだろう、りく婆は寂しげに目を伏せた。

「……そうさ。知っていた。みきが最初、聖に多恵と名乗った時から、こうなることは分かっていたのさ。あんたが持ってきたあの本を見るまで確信は持てなかったが、みきの態度で分かる。あの子はあれで正直者なんだ」

聖が顔を上げる。

「それを私たちに教えたら、私たちはおみきさんを止めてしまうから　だから、おみきさんは私たちに言わないよう、口止めしてた。そうでしょ、おばあちゃん」

りく婆は驚いて聖を見る。
てつきり、どうして教えてくれなかったのかと、責められるものと覚悟を決めていたのだ。

「私が止めに入ってしまったら、全て上手くいかなかったんだ。おみきさんが斬られても、与右衛門さんが救われない　どころか、ずっと、永遠に彷徨うことになってしまう。だから、私には止めて欲しくなかったんだよね。与右衛門さんを救えるのが、私しかないから」

「聖、あんた……」

聖は目をごしごしと擦ると、りく婆の胸からそつと離れた。

「最後に、おみきさんが教えてくれたの。あの時　あの夜、与右衛門さんが私ごとおみきさんを斬らなかつたのは、私が、多恵さんにそっくりだったから。与右衛門さんは覚えてたんだよ」

聖は悲しそうに笑った。

「どんなに気が狂っても、多恵さんの顔をね」

この偶然に、あたいはとっても感謝してるんだよ。

偶然とは、そういう意味か　。

玄幽はおみきの言葉を思い出し、納得した。

ただ自分が封印を解いただけではなく、多恵とそっくりな顔をした聖がいなければ、少なくとも与右衛門は永遠に救われることはなかつたのだ。

誰かが多恵の代わりに導いてやらなければ、与右衛門は永遠に、赤い傘を探しては、斬って斬って斬り続けなければならなかつたのだ。

みきを斬っても決して満たされぬ想いを抱え　。

数百年続いた、長い呪縛が、これでようやく終わったのだ。

りく婆は雪の降りしきる空を見上げた。

「みきは　あの子はね、多恵さんを井戸に放り込んで、自分もその中で死ぬつもりだったんだ。でもいざとなると、その勇気がなかった。足がすくんで、震えて　死に物狂いでその場を離れて、どこまでも走ったんだ。朱塗りの傘だけを握り締めてね。そしてある尼寺にたどり着いて、そこで尼になった」

聖が持ってきた、あの赤い和傘をそつと撫でた。

「こいつに憑いてたのは　だから、あの子そのものじゃあないの

さ。あの子が尼になっても拭い去ることが出来なかった、後悔と懺悔の塊なんだよ」

玄幽は天を仰ぐ。

そしてりく婆に、あるいは遙か高みにいるであろうおみきに、そつと問いかけた。

「おみきさんは 救われましたかね」

「……さあてね。ま、あたしももうすぐ向こうに行くだろうからね、聞いておいてやるさ」

りく婆は、本当に楽しそうに笑って、そつと目尻を拭った。

やがて雪も止むのだろう。

そして鈴鳴町は平穏を取り戻す。通り魔もない、おみきもない、ただの平凡な片田舎へと戻る。

玄幽は思う。

これで、通り魔騒動は終わった。真相を知るのは、ここにいる三人だけ。

そもそも、これは事件でもなんでもなかったのだ。煮え切らない想いが、数百年にわたってくすぶり続けた、その最後の輝きに過ぎなかったのだ。

この事件は、胸に仕舞っておこう。研究部の活路にこそなりえなかったが、でも。

玄幽は、きちんと記憶しておこうと思った。

かつてこの鈴鳴の地で起こった哀しい事件と、それにまつわる人々の、本当の物語を。

新しい、鈴鳴町怪異録として。

第1話 第20章 終り、あるいは始まり（後書き）

第1話、終幕です。

ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございます！
至らない文章で恐縮ですが、楽しんでいただけたのであれば、この上なく嬉しいです。

元々、これはこの「赤い傘の話」だけで完結していたものでした。ただ、物語に奥行きが与えられる余地がありましたので、どうせなら山猫村玄幽と聖、そのほかの人々に頑張ってもらって、鈴鳴町サーガを確立してみようと、こうして全6部構成に作り直したのです。

これから残り5話、鈴鳴町を舞台にして怪異録はまだまだ続きます。0、1話だけでは分からなかった部分も、これから見えてくることでしょう（たぶん）。

少し間を開けて、7月中には第2話を公開していけたらと思っております。第1話のテンションから、今度は少しアップテンポにしていきたいなと考えております。

よろしければまた、覗いてみてください。

本当にありがとうございます！

7月12日追記

色々忙しくて、第2話を今月中に上げられるかちょっと微妙です

……

新人賞や夏のホラー祭りの原稿も並行してやっていますもので、多少遅れるかもしれませんが。

申し訳ない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8905g/>

鈴鳴町怪異録

2010年10月20日18時52分発行